

2020 年度自己点検・評価フォーム (学部用)

国際観光学部・国際観光学科

(国際観光学部自己点検・評価活動推進委員会承認)

【基準1】理念・目的

【点検・評価項目】

大学の理念・目的、各学部における目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。大学・学部等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。

【評価の視点】

(将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策の設定)

- ① 各学科の中・長期計画その他の諸施策の計画は適切に実行されているか。実行責任体制及び検証プロセスを明確にし、適切に機能しているか。また、理念・目的等の実現に繋がっているか。
- ② 学部、各学科の目的の適切性を、定期的に検証しているか。
- ③ 理念・目的の適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評定： **A：目標が達成されている** >

本学部は文部科学省への設置計画に基づき教育を履行している。

学科の中・長期計画その他の諸施策の計画は、設置計画に示した教育を完遂するためのものである。本学部は、1学科5コースで構成されている。各コースは、適宜コース会議を開き、中・長期計画に合致した教育体制や授業内容などの改善策の立案を担っている。

一方、学部内の各種委員会は、同計画に関する所管事項の実現策を検討している。そして、コース会議や各委員会活動での検討結果は、学科会議や教授会で報告され、了承を得たのちコース会議、委員会に差し戻され実行されている。また、中・長期計画やその他の学部施策の策定・実施などで学部内委員会を横断して議論すべき事項があった場合は、関連する委員会を糾合した拡大委員会を組織し、そこで検討する。

これにより、当学部は、中・長期計画の実現に向けて責任体制を明確にしつつ、学部教員全員で協力し合う体制を整えた。中・長期計画の実行状況は以下の通りである（資料1-1）。

「計画① 将来ビジョンの明確化と教育研究組織の改革」では、観光業界が当学部をどのように捉えているかを、業界有識者にインタビューしたところ、「実務的な授業と理論的な授業が適切に混ざり合った優れた教育を行っている」という評価を得た（資料1-2）。そして、この評価結果は、学部が有するビジョンが外部に共有されていることを示しており、ビジョンの明確化を図った成果である。他方、教育研究組織の改革として、新規採用教員全員に入職前ガイダンスを行い、彼・彼女らが学部ビジョンや教育方針を正確に理解、共有できるように配慮した。加えて、実務を知りつつマネジメントなどの諸理論を理解できる学生を育成するという学部ビジョンを果たすため、優れた研究歴に加え、実務経験を重視した教員採用を行った。また、教員組織の男女差を少しでも解消すべく女性教員を意識して採用した。これにより、2020年4月には、学部教員34名中11名が女性教員になる（資料1-3）。

「計画② TOYO GLOBAL DIAMONDS 構想の着実な推進」では、学部内の教務委員会を所管委員会とし、グローバル委員会の協力を得ながら、海外での課外教育活動の充実を目途にして、カリフォルニア州立工科大学英語研修プログラムの他にハワイ大学英語研修プログラムを新たに立ち上げ実施した。さらに、グローバル委員会所属教員が中心となって学生の英語力の向上を図ったことで、64名がシルバーを、395名がブロンズを獲得することができ、これは前年に比べ、それぞれ16名、188名の増加であった（資料1-4）。

「計画③ 求める学習成果の明示と質の高いカリキュラムの構築」では、観光業界で活躍する人びとのなかか

ら観光教育に造詣が深い人を当学部の教育サポーターとして選任した（資料 1-5）。そして、学科長を責任者、教務委員会を実施組織として、その教育サポーターに対して学部カリキュラムの評価を依頼した。そして、そこで得られた意見を新カリキュラムの策定に活用した。

「計画④ 教育の質的転換と教育システムの国際化」では、国内外の観光系行政機関でのインターンシップの実施を目指し、フランスの観光公社で 2 名の学生がインターンシップを実施した。そして、6 件の企業訪問を行うことで理論が観光現場でどのように応用されているかを学んだ。

「計画⑤ 新たなキャリア教育と就職支援の充実」では、責任者を学科長、実施組織を就職委員会とする「公務員養成講座の開設」を掲げ、大原簿記学校の協力を得てスタートすることができた。しかしながら、これに関しては、当初予測していたような参加者が集まらず、今後別の方法で進めていくべきかを検討中である。

「計画⑥ 研究の国際化と産学官の連携強化」では、責任者を学科長とし「国連世界観光機関が行う世界的な観光政策づくりや人材開発への協力」を掲げ、国連世界観光機関（UNWTO）が行う世界的な観光政策づくりや人材開発への協力同機関の年次総会へ参加した。加えて、「ASEAN 観光教員・学生サミット」に当学部の 3 学生が参加し、わが国の観光事情などについて英語で報告を行い、高い評価を得た。また、2020 年度には産官学連携委員会が設立され、国内外の観光関連組織との共同研究や地域との連携プロジェクトを強化していく予定である。

「計画⑦ 社会貢献と社会連携活動の充実」では、学科長を責任者、広報委員会、入試委員会を実施組織として、観光を通じて震災後の地域復興を担う人材を養成することを目的にした「公募型地域復興奨学金制度の導入の計画」を模索したが、本計画の実現には授業料免除や東京での居住先、または生活費の確保などの解決すべき諸課題があり、実現に至っていない。しかし、当該学生の入学後は、当学部の観光プロフェッショナル・コースには「給与を得て働きながら学ぶ」仕組みがあるため、日々の生活費はこの仕組みを通じて確保できると考える。そのため、学生の転居や居住先確保などに対する金銭的な負担軽減のために、航空会社や不動産会社などから支援企業を求めるとにより本計画の実現を目指したい。

「計画⑧ 学部学科独自の計画」では、責任者を学科長、実施組織を卒業生連携委員会とし「卒業生サークルの構築と卒業生相互および現役生との交流の場の創出」を掲げた。そして、ホームカミングデイを利用して、卒業生サークルの基礎をつくった。また、キャリアデザインの授業において、その卒業生を講師として招き、授業履修者との交流を図った。

学部の理念と目的については、わが国、中・長期的にはアジア地域や世界レベルで、代表的な観光系学部としての社会的な認知を得るため、産業界や行政などの外部組織と連携しながら、高い一般教養を身につけ勤労意欲に富み、近い将来観光業界をリードできる人材を育成するための教育・研究活動を実施することである。そして、この理念や目的の適切性については、コース会議、各種委員会会議や教授会などの学部内だけでなく、外部有識者や卒業生の評価を取り入れながら不断に検証し、改めるべきことは遅滞なく改めたい。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

本学部は 1 学科 5 コースで構成されている。本学部の特長として、各コースで学部、学科の理念・目的の適切性を議論し、さらにコース連絡会議、学科会議、教授会とボトムアップ方式に検証する仕組みを構築していることが挙げられる。

【問題点・課題】

検証手続きの透明性を担保するために、全体を第三者的立場で監視する役割が必要であると考えられる。

【将来に向けた発展方策】

外部の有識者を招請し、定期的に検証する専門委員会を創設することを計画している。

【根拠資料】

- 資料 1-1 国際観光学部国際観光学科中長期計画
- 資料 1-2 観光業界有識者へのインタビュー結果
- 資料 1-3 2020 年度国際観光学部所属教員（専任教員/兼任講師）一覧
- 資料 1-4 TOYO GLOBAL DIAMONDS 獲得者リスト
- 資料 1-5 教育サポーター一覧

【基準4】教育課程・学習成果（その1）

【点検・評価項目】

- （1）授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。
- （2）授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【評価の視点】

（課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定及び公表、教育課程の編成・実施方針と学位授与方針との適正な関連性）

- ① 教育目標とディプロマ・ポリシーは整合しているか。また、ディプロマ・ポリシーには、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果が明示されているか。
- ② カリキュラム・ポリシーには、教育課程の体系性や教育内容、科目区分、授業形態等を明示し、学科のカリキュラムを編成するうえで重要かつ具体的な方針が示されているか。
- ③ カリキュラム・ポリシーは、教育目標やディプロマ・ポリシーと整合しているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評定： **A：目標が達成されている** >

国際観光学部における教育目標とディプロマ・ポリシーは整合しており、学生が修得することが求められる観光学に関する基礎知識の習得、産業、政策分野で必要とする知見の理解、実践的かつ実務的に対応できる技術の修得、異文化理解能力の修得、観光の将来像を描くための思考力や想像力の修得、世界の文化、宗教観、地球環境に関する幅広い教養の修得など知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果がディプロマ・ポリシーに明示されている（資料4(1)-1）。

本学部におけるカリキュラム・ポリシーは、教育目標やディプロマ・ポリシーと整合している。例をあげるならば、「国際観光学部規程」には全員が一年次に「観光学概論」を学び、観光の基礎知識を理解することが掲載され、二年次から経営、経済、政策、旅行業、航空業などについて学び、グローバルなコミュニケーション能力を養うため外国語科目では2か国語以上の言語を習得する方針をカリキュラム・ポリシーとして明示している（資料4(1)-1）。しかしながら現在のカリキュラム・ポリシーは、コースごとに必修とすべき科目区分や授業形態等が具体的に明示されていないため、学科長及びコース長を責任者とし、教務委員会を実施組織として新カリキュラムを策定している。新カリキュラムにおいては、カリキュラムマップを実効性あるものとするとともに、学習ステップの明確化を図るために、これまでの5コースというコース分けを廃止し、学習コースの選択のステップを、

- ① 1年生は「総合学である観光学」の「基盤形成学習」をする段階と位置付け、観光学の全体像を知るために、「観光学を構成する基幹的科目」を学習する。
 - ② 2年生は「大ぐくりの専攻別」の「専門的学習」をする段階と位置付け、観光学を構成する大ぐくりの専攻分野（観光政策・ツーリズム系、ホスピタリティ系、観光プロフェッショナル系）を選択して、その中核的科目を学習する。
 - ③ 3年生以降は「特化した専門分野別」の「発展的な学習」をする段階と位置付け、学習内容の深化や横展開を図るための学習をする。また、必要に応じて、副専攻的な学習を実施できるようにする。
- 以上のように定めている（資料4(1)-2）。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

本学部の長所は、学部長、学科長および各コース長を構成員としたコース連絡会が統括する専門委員会および教授会、学科会議において適切にカリキュラム・ポリシーと教育目標、ディプロマ・ポリシーとの整合性を検証していることである。

【問題点・課題】

現在のカリキュラム・ポリシーには、コースごとに必修とすべき科目区分や授業形態等が具体的に明示されていないが、2021年度の新カリキュラムにおいて明示する。

【将来に向けた発展方策】

2021年度の新カリキュラム編成に向けて、コース会議とコース連絡会で教育課程の体系性や教育内容、科目区分、授業形態等について議論され、教授会と学科会議に諮られている。

【根拠資料】

- ・資料 4(1)-1 東洋大学国際観光学部規程
- ・資料 4(1)-2 新カリキュラムのカリキュラムマップ

【基準4】教育課程・学習成果（その2）

【点検・評価項目】

- (1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

【評価の視点（1）】

（適切に教育課程を編成するための措置）

- ① 教育課程は、授業科目の順次性に配慮して、各年次に体系的に配置されているか。
- ② 各授業科目の単位数及び時間数は、大学設置基準及び学則に則り適切に設定されているか。
- ③ 授業科目の位置づけ（必修、選択等）に極端な偏りがなく、教育目標等を達成するうえで必要な授業科目がバランスよく編成されているか。
- ④ 専門教育への導入に関する配慮（初年次教育、導入教育の実施等）を行っているか。
- ⑤ 基盤教育、専門教育の位置づけを明らかにしているか。卒業、履修の要件は適切にバランスよく設定されているか。
- ⑥ カリキュラム・ポリシーに従い、学生に期待する学習成果の修得につながる教育課程となっているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価： **B：目標の達成が不十分** >

教育課程は、授業科目の順次性に配慮して、各年次に体系的に配置されている。また、各授業科目の単位数及び時間数についても、大学設置基準及び学則に則り適切に設定されている。ただし、必修がきわめて少ない配当となっている点に課題がある。必修科目については新カリキュラムにおいて増設されるほか、特にグローバル化を推進するために、語学科目の英語や中国語が増設される予定である。

カリキュラム・ポリシー1（CP1）「全員が1年次に「観光学概論」を学び観光の基礎知識を理解するほか、1年次～4年次に少人数双方向の演習科目を体系的に履修し、特定テーマの設定による調査・報告・討論を通じて論理的に考える力を身につけます。」

国際観光学部においては、初年次科目として観光の基礎知識の理解を目的とした「観光学概論」「観光基礎演習」を必修科目として全員が履修する。これらの科目の修得及び春に実施する全員海外研修において観光産業の見学や観光地の訪問をすることによる自身のキャリア形成を意識した専門コースの登録など専門教育への導入に関する配慮は十分になされている。全員海外研修は本学部として特色ある教育効果を生み出していると言える。2年次にゼミ選択を行い、2年から4年まで同一の指導教員のもと演習科目を履修し、論理的思考力を養っている。また、教養教育、専門教育の位置づけの明示、および卒業、履修の要件の適切な設定などにより学生に期待する学習成果の習得につながっている。一部の実習科目は参加する学生が少数であり、学部内の専門委員会で教育内容について精査が必要である。

CP2「2年次から5コースに分かれて、経済学や経営学に加え、旅行業、航空や鉄道等の運輸業、宿泊や飲食などのサービス業、観光まちづくりや観光政策の分野に関する特徴ある観光学の科目も学習することにより、当該分野の専門的知識を体系的に学びます。また、英語による授業や実習授業の履修により実践的かつ実務的に対応できる技術を修得します。」5コースの特色に沿った授業科目を配し、履修要覧にはコースごとのモデル履修を示している（資料4(2)-1）。また英語で学ぶ授業等として、例えばドイツをはじめとして諸外国の文化や観光地について英語で学ぶ授業を学生が履修できるようにしている。

CP3「課題や研究への取組みを通じて、客観的かつ論理的に主体的に発信する能力、コミュニケーション能力

などを身につけます。」それぞれの授業科目で課題発見能力やコミュニケーション能力を向上させる取り組みが行われている。例えば、必修英語科目 English Tourism Project では、地方都市の活性化のための方策について SWOT 分析を英語で行わせ、グループプレゼンテーションで発表させている。

CP4「グローバル化に対応できるコミュニケーション能力を身につけるため、外国語科目では 2 ヶ国語以上の言語を習得します。このことにより異文化理解の能力を身につけます。」英語だけでなくさまざまな言語、ドイツ語、スペイン語、韓国語、中国語等を学生は習得できるよう語学科目を配置している。特にサービス・コミュニケーションコースでは中国人観光客の増加に伴い、英語の他に中国語を学ぶことを推奨している。

CP5「全学共通となる基盤教育を学習することにより、幅広い知識・教養を身につけます」基盤科目 20 単位以上を卒業要件とし、特に哲学・思想に関する科目を 2 単位必修としている。美術や経済学、社会学などの科目から選択し、さまざまな角度から教養を深める教育課程となっている（資料 4(2)-1）。

【評価の視点（2）】

（学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施）

- ① 学科の人材養成の目的に即した、社会的及び職業的自立を図るために、キャリア教育等必要な教育を正課内に適切に配置しているか。また必要な正課外教育が適切に施されているか。
- ② 教育目標に照らした諸資格の取得、その他必要な知識・技能を測る試験の受験に係る指導や支援環境が整っているか。
- ③ 学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成に向けて、学科内の学生への指導体制は適切であるか。また、学内の関係組織等の連携体制は明確に教職員で共有され、機能しているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評定： **A：目標が達成されている** >

「キャリアデザイン」科目をⅠ～Ⅲまで設置し、1 年次より修得することで早くからキャリアへの意識づけを図ることを目指している。また、各種インターンシップでは、学部長と観光プロフェッショナル・コース担当教員が連携し、ペニンシュラホテルやはとバスといった一流企業の下で着実にキャリア意識を高めることも可能となっている。また、ツーリズム・コースの教員が連携し国家試験である「総合旅行業務取扱管理者試験」への対策的講義の充実、合格率の向上に努めている（資料 4(2)-2）。管理者試験の「国内」に合格したものは「総合」を受験できるような環境を整えている（資料 4(2)-3）。

学内委員会組織である「課外活動委員会」において、学生の単位認定を伴う国内外のインターンシップの実施に向けた協定、派遣などを一元的におこなうほか、定期的にインターンシップ先に教員を派遣し学生の様子を確認している。正課においては教務委員会を中心に観光フィールドワークの実施を軸としつつ、ゼミによっては地域おこしの現場に訪れるなど個別的な対応も実施し学生の自立に向けた能力育成に努めている。観光フィールドワークにおいては、フランスの地方都市の DMO において日本人観光客誘客のプランづくりのフィールドワークに携わりながら、海外での業務のトレーニングを実施している。

また、学内委員会の「キャリア形成支援委員会」では、学生のキャリア形成を支援する目的で、「キャリアデザイン」科目内において、学外講師を招聘し、学生の学びを深める講義をサポートしている。さらに、学生の就職指導、就職行事の企画・実施等についても中心的な役割を果たしており、今後は、就職・キャリア支援課が実施するイベントやセミナーの情報を教員間で共有し、学生への参加促進を進めていく。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

1年次に全員海外研修を行い、早くからコース別カリキュラムへの意識付けを行うとともに、海外で観光産業の実践について学んでいる。また、「キャリアデザイン」科目を1年次より修得することで、早くからキャリアへの意識づけを図ることを目指している。また、各種インターンシップでは、ペニンシュラホテル等一流企業の下で着実にキャリア意識を高めることにつながっている。

【問題点・課題】

授業科目の中で必修が少なく、今後も検討が必要である。また、学生のグローバル化に対応できるコミュニケーション能力を養成するために、語学科目の英語や中国語の必修の増設が必要である。これらの点については2021年度の新カリキュラムにて対応予定である。実習科目では履修者数に偏りがあり、一層の充実に向けた検討が必要である。

【将来に向けた発展方策】

必修科目については、完成年度以降にその増設を具体的に検討している。特にグローバル化を推進するために、語学科目の英語や中国語の必修の増設を検討中である。

【根拠資料】

- ・資料 4(2)-1 2019年度国際観光学部履修要覧 (pp.53-61)
- ・資料 4(2)-2 2019年度「総合旅行業務取扱管理者試験」合格率
- ・資料 4(2)-3 2019年度インターンシップ先一覧

【基準4】教育課程・学習成果（その3）

【点検・評価項目】

（1）学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

【評価の視点】

（授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置）

- ① 学生の主体的参加を促すための配慮（学生数、施設・設備の利用など）を行っているか。
- ② 履修指導の機会、オフィスアワーなど、学生が学習に係る相談を受けやすい環境が整っているか。また、その指導体制は適切であるか。
- ③ 学生の学習を活性化し、教育の質的転換を実現するために、学科が主体的かつ組織的に取り組んでいるか。
- ④ カリキュラム・ポリシーに従い、各科目の学習到達目標に照らした教育方法が適切に用いられているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価： **A：目標が達成されている** >

本学部では、2018年度の入試より学生受け入れの際に厳格に定員管理を行っていることから、クラス編成上の負担が減りつつある。このことから、段階的に少人数教育が実現している傾向にある。学生数を減らしたことに伴い、1年生の演習のクラス規模も縮小し、初年時からよりきめ細やかな指導体制を整えている。1年次秋学期からのコース分けの実施および2年次秋学期からのゼミ開始によって、主体的かつ専門的に学生が参加できるような配慮を行っている。サービス・コミュニケーションコースでは学内に設置している調理実習室での調理実習、料理の提供サービスの実務およびバーカウンターを利用した料飲サービス実務の体得などにより学生参加型の主体的な学びを実現している。また、観光プロフェッショナル・コースでは学内のみならず学外の関連企業の協力のもと2～3年といった長期のインターンシップを実施している（資料4(3)-1）。

履修指導の機会やオフィスアワーなどを通じて、学生が学修に係る相談を受けやすい環境が整っており、その指導体制は適切である。精神的不調から大勢の教室で一時的に授業を受けることが困難な学生などにはオフィスアワーに指導するなどの処置を行っている。また、留学生に対する生活・学習支援の一環として日本人学生による留学生サポート制度を整えている（資料4(3)-2）。

学部長、学科長および各コースの長、大学院研究科長、専攻長を構成員としたコース連絡会を設置し、学部内の専門委員会、教授会、学科会議を毎月開催し目的別に使い分けることによって学生の学修状況の把握、学習成果の習得につながる教育を組織的に実現している。アクティブ・ラーニングなどについては、これまでは反転授業などの試みはあまりしてこなかった。しかし、FD活動を通じて学科内授業でのアクティブ・ラーニングの実践について情報共有を図ることで、学生参加型の主体的な学びの機会を提供している（資料4(3)-3）。

なお、本学部は3年目であるが、カリキュラム・ポリシーに従い学生に期待する学習成果の修得につながる教育方法を計画通り履行中である。例をあげるならばグローバル化を推進させるために国際的に著名なハワイ大学マノア校でのエコツーリズムを学ぶ海外研修の計画を実施した。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

初年時から少人数制の観光基礎演習クラスを配置し、よりきめ細やかな指導体制を整えている。1年次秋学期からのコース分けの実施および2年次秋学期からのゼミ開始によって、主体的かつ専門的に学生が参加できるような配慮を行っている。また、留学生に対する生活・学習支援の一環として日本人学生による留学生サポート制度を整えている。

【問題点・課題】

2年次秋学期から開始されるゼミであるが、各ゼミによって人数の偏りがみられる点が問題点である。ゼミによっては20名以上が所属するゼミが存在する。

【将来に向けた発展方策】

各ゼミの定員を同数にするよう、今後は教務委員会によって定数の設定を厳格に行い、少人数制を徹底することにより学生の主体的な学びを促進することを検討中である。

【根拠資料】

- ・資料4(3)-1 2019年度国際観光学部履修要覧 (p.38)
- ・資料4(3)-2 国際観光学部留学生サポート制度資料
- ・資料4(3)-3 2019年度FD活動報告書

【基準4】教育課程・学習成果（その4）

【点検・評価項目】

（1）成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

【評価の視点】

（成績評価及び単位認定を適切に行うための措置）

- ① 成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置を取っているか。
- ② ディプロマ・ポリシーと卒業要件が整合しており、ディプロマ・ポリシーに則って学位授与を行っているか。
- ③ 学位授与にあたり、明確な責任体制のもと、明文化された手続きに従って、学位を授与しているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価： **A：目標が達成されている** >

シラバスに成績評価の指針を公開している（資料4(4)-(1)-1）。各教員が成績評価をする際の客観性と厳格性を担保している。演習系科目についても、出席やレポートの採点結果など可能な限りエビデンスを残すようにすることで、同様の効果が期待できることを目指している。他方、GPAの分布検証や成績S～Dまでの割合がどの程度であれば適切であるかの考察が遅れていたが、これらについても学部内教務委員会が中心になり検討を開始した。

本学部の前身である国際地域学部国際観光学科では、ディプロマ・ポリシーと卒業要件との整合をカリキュラム面からしっかりと検証しており、ディプロマ・ポリシーに則って学位授与がなされている。国際観光学部国際観光学科においても、その方針を継承しディプロマ・ポリシーと卒業要件のカリキュラム面からの検証およびディプロマ・ポリシーに則った学位授与などの学科全体での厳格な検証を行っている。卒業論文発表会を実施し学位授与にふさわしい内容であるかについても検討している（資料4(4)-(1)-2）。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

全ての科目においてシラバスに成績評価の指針を公開し、成績評価の客観性と厳格性を担保している。また、卒業論文発表会を課し、学位授与にふさわしい内容に到達しているかを検証している。

【問題点・課題】

成績評価結果の具体的な分析について、現在行えていない。特に、演習系・実習系科目における評価の客観性担保に課題が残されている。

【将来に向けた発展方策】

教務委員会を中心として、全学的に提供される予定の成績データの検証ツール等を用いて、成績評価結果の具体的な分析を行い、評価の客観性担保に向けた検討を進めている。

【根拠資料】

- ・資料4(4)-(1)-1 2019年度シラバス作成ガイドライン
- ・資料4(4)-(1)-2 2019年度 国際観光学科 卒業研究論文の提出・発表等について

【点検・評価項目】

(2) 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

【評価の視点】

(各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定、学習成果を把握及び評価するための方法の開発)

- ① 学科として、各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測るための評価指標（評価方法）を開発・運用し、教育内容・方法等の改善に努めているか。
- ② 学生の自己評価や、学部、学科の教育効果や就職先の評価、卒業時アンケートなどを実施し、かつ活用しているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評定： **B：目標の達成が不十分** >

国際観光学部では「観光立国」実現に向けて実務と理論の両輪を意識した教育を行っている。学習成果を測るための評価指標については、2020年3月31日付の「2019年度自己点検・評価結果に係る提言（19評支発第14-12号）」に従い、授業科目別に作成した。今後は、この指標と学生の単位取得・成績取得状況との比較などを通じて、その有効性を高めたい。さらに、学修成果は、当学部学生が従業員に高度なホスピタリティ・マインドを求めている優良観光関連企業へ就職できることにも現れると考える。そして、この就職に関して、おおよそ6割の学生がそのような観光関連企業に就職しているが、今後はこの割合をより高めたいと思慮している（資料4(4)-(2)-1)。

国際観光学部では、海外インターンシップの充実に加え、特に観光プロフェッショナル・コースでは長期企業研修を実施しているため、多くの学生が研修先の企業・組織から仕事ぶりや業務知識などに対する評価を受けている。そこで、それら企業・組織から得た評価を授業運営に反映することで、今後もその不断な改善に取り組みたい。他方、授業評価アンケートや卒業時アンケートを実施しており、これらを授業成果に対する判断材料として、積極的に活用する。しかし、学修成果を高めるための個々の改善は、各教員に委ねられているのが実情であり、学部全体でのPDCAサイクルが確立されているとはいえないため、これが今後の改善課題として残っている。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

学習成果を測るための評価指標（評価方法）として国際観光学科生の観光関連企業およびホスピタリティを必要とする一般企業への就職率を指標としていること。

【問題点・課題】

授業評価アンケートや卒業時アンケートなどを活用し、学修成果を高めるための改善については、各教員に委ねられており、学部全体でのPDCAサイクルは確立されていない。

【将来に向けた発展方策】

全教員を対象に勉強会や学外専門家による講演会を年に1～2度実践し、学修成果を高めるための改善について学科全体で情報共有することを検討している。また、学生に対するアンケートを年に1度実施し、その結果を関連委員会で分析し対応を検討する。観光プロフェッショナル・コースにおいては、長期インターンシップの効果を検証するプロジェクトを進行させており、この結果を利用することを検討している。外部専門家と学部教員などから成る評価委員会を立ち上げ、得られた結果や意見を基に、その改善を図ることとしたい。

【根拠資料】

- ・資料 4(4)-(2)-1 観光関連企業への就職率（2019年度）

【点検・評価項目】

(3) 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【評価の視点】

(適切な根拠(資料、情報)に基づく点検・評価<学習成果の測定結果の適切な活用>、点検・評価結果に基づく改善・向上)

- ① カリキュラム(教育課程・教育方法)の適切性を検証するために、定期的に点検・評価を実施しているか。また、具体的に何に基づき(資料、情報などの根拠)点検・評価、改善を行っているか。
- ② 教育目標、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限・手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善に繋げているか。
- ③ 授業内容・方法の工夫、改善に向けて、学内(高等教育推進センター)、学外のFDに係る研修会や機関などの取り組みを活用し、組織的かつ積極的に取り組んでいるか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

<評定: **A:目標が達成されている**>

カリキュラムの適切性を検証するための定期的な点検・評価を学長施策(教育活動改革支援予算)として実施している。この取り組みは、観光分野の有識者や観光関連企業の人事担当者に、授業参観や現在のカリキュラムの監修を依頼したり、または卒業生に対して在学時代の学習を振り返り、有益だった授業や不足していた授業などを指摘してもらったりすることで、当学部のカリキュラムや授業内容の有効性と妥当性を検証するとともに、改善点を抽出し、これらの検証結果を学部完成年度以降の新カリキュラム作りの参考にするものである。

この取り組みを用いて、昨年度と今年度の2年に渡り、主に観光産業に携わる有識者や観光関連企業の経営者層から本学部のカリキュラムに対する評価を得た。その結果、ホスピタリティ産業のマネジメント職に就くためには、会計、ファイナンス、マーケティング、人材マネジメント、統計分析などが重要であり、当学部のカリキュラムにはそれらが盛り込まれていることから高い評価を得た。

しかし、一方で、リベラルアーツ系の授業、例えば、美術や芸術、音楽、文学、地理、歴史などに関連した授業が不足しているのではないかという意見もあった。また、インターンシップについては、賛否両論あり、特に短期間のそれは単なる職場体験で終始するため有意義ではないという指摘もあった。これらの意見・指摘に関しては、今後再検討し、その結果を2021年度から始まる新カリキュラムの策定に生かしたいと考えている(資料4(4)-(3)-1)。

今後は学部長を責任者とし教授会や教務委員会やその他の各委員会等で次のカリキュラムの改善や学生へのより良い教育に活かす予定である。コース会議では、適宜次回のカリキュラム改訂に向けて、現在のカリキュラムの見直し、および新カリキュラムの展望について検討されている。

教育目標、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの適切性の検証については、学部長、学科長および各コース長を構成員としたコース連絡会が統括する専門委員会および教授会、学科会議において適切に検証するよう努力しており、責任主体、組織、権限、手続きは明確である。

学部内の教務委員会やFD委員会主催で学外の研修会などに参加した教員からのフィードバックをするほか、コースごとに科目特性の説明会や将来のキャリアについての検証を行っている。2019年は12月12日に学部FD活動として、ツーリズム・コースの教員による授業内容の工夫について取り組みが紹介された。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

5つのコースによるコース会議を毎月開催し、適宜次回のカリキュラム改訂に向けて、現在のカリキュラムの見直し、および新カリキュラムの展望について検討している。

【問題点・課題】

現状ではカリキュラムの適切性を検証するための点検・評価の検証時期が明確にされていない。

【将来に向けた発展方策】

教授会や教務委員会等で現在のカリキュラム見直しが行われている。将来的には、カリキュラムの適切性を検証するための定期的な点検・評価の体制づくりのアイデアを、コース会議を中心としてボトムアップで提案していくことを検討している。カリキュラムの適切性を検証するための点検・評価の検証時期を内規で明確に定めることを検討中である。

【根拠資料】

・資料 4(4)-(3)-1 国際観光学部教授会議題・資料 (2020年5月14日 pp.134-143)

【基準5】学生の受け入れ（その1）

【点検・評価項目】

- (1) 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。
- (2) 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

【評価の視点】

(学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表)

(学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定、入試委員会等、責任所在を明確にした入学者選抜実施のための体制の適切な整備、公正な入学者選抜の実施、入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公正な入学者選抜の実施)

- ① アドミッション・ポリシーには、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像、入学希望者に求める水準等の判定方法を示しているか。
- ② アドミッション・ポリシーに従って、入試方式や募集人員、選考方法を設定しているか。
- ③ 受験生に、入試方式別に、募集人員、選考方法を明示しているか。
- ④ 一般入試、推薦入試、AO入試等、各入試方式の趣旨に適した学生募集や、試験科目や選考方法の設定をしているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評定： **A：目標が達成されている** >

アドミッション・ポリシーには、入学前の学修歴、学力水準、能力等の求める学生像、入学希望者に求める水準等の判定方法が明示されている（資料5(1)-1）。「観光は、お客様に喜んでいただいて…(略)…必要なことは、まさにこの「お客様に喜んでいただく」…(略)…常に相手の立場に立って、相手が喜ぶ姿を想像し…(中略)…自分の欲を捨て…(略)…人材を求めます。」「語学能力は必須です。高校時代は特に英語を身につけておくことも重要です。中国語等、他の言語の習得も有効です。」

アドミッション・ポリシーに従い、基礎学力を考査すると共に、社会現象に関する理解や洞察力、論理性、語学力などを重視した選考を行っている。また、募集定員もバランスよく配分し、そのことを明示している。

一般入試では基礎学力、推薦入試では高校時代の成績や語学試験や部活動、社会貢献活動等の取り組み、生活態度、AO入試では基礎学力と共に英語のプレゼンテーションを実施する入試種別や観光に関する企画力などの個性を重視し、それぞれの試験の趣旨に合った選考方法、試験科目を設定している（資料5(1)-2）。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

AO入試では特に観光プロフェッショナル・コース（3年間企業でインターンシップを行うコース）に特化した募集も行っている。将来、観光分野で即戦力になる学生を選抜するユニークな取組を行っている。

【問題点・課題】

アドミッション・ポリシーに中国語等他の言語の習得も有効であると記載しているが、中国語のプレゼンテーションを実施する入試種別は存在しない。

【将来に向けた発展方策】

現在、2021 年度から始まるカリキュラム改訂に向けて、アドミッション・ポリシーの変更を検討中である。
新たなアドミッション・ポリシーは、入試種別やカリキュラム・ポリシーとの連動性を踏まえて、策定していく。

【根拠資料】

- 資料 5(1)-1 東洋大学国際観光学部規程
- 資料 5(1)-2 2020 年度公募制推薦入試 入試要項 (pp.30-32)

【基準5】学生の受け入れ（その2）

【点検・評価項目】

- (1) 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。
- (2) 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【評価の視点】（入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理）

（学生の受け入れに関する適切な根拠〈資料、情報〉に基づく点検・評価、点検・評価結果に基づく改善・向上）

- ① 定員超過または未充足について、原因調査と改善方策の立案を行っているか。

★学科における過去5年の入学定員に対する入学者数比率の平均が0.90～1.25（※実験・実習系の学科は1.20）の範囲となっているか。

★学科における収容定員に対する在籍学生数比率が0.90～1.25（※実験・実習系の学科は1.20）の範囲となっているか。

- ② 学生の受け入れの適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善に繋げているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

<評定： **A：目標が達成されている**>

本学部の入学定員及び収容定員の超過率は平均1.01であり、適正に管理できている。（資料5-(2)-1）

学生の受け入れの適切性を検証するため、責任主体・組織、権限、手続面は、入試委員会を中心として教授会での報告・承認を必須としている。入試において平均的な入学者数を策定し学部入試委員会において入学者数策定の分析を行い、教授会で検証している。AO入試などはコースごと、入試種別ごとに人数を決定し、教授会で審査している。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

AO入学選抜においては入試に関わった全教員が、論述試験の合格基準点や面接の基準点の合意を得るよう合否判定会議を開催しており、その結果を教授会で審議している。

【問題点・課題】

公募制AO型推薦入試地域振興型で入学した学生のGPA（2020年1月末日時点）が2.89、同サービス系3.08、同総合系3.05であったのに対して、一般前期3科目均等型で入学した学生のそれが3.21～3.41であるなど、AO入試で入学した学生の入学後の成績が一般入試で入学した学生よりも低いため、前者の改善が課題になっている。

【将来に向けた発展方策】

入試委員会、コース会議等で、学生の受け入れの適切性を検証していく予定である。今後のAO入試では基礎学力をより精査する必要がある。また、AO入試の学生には入学までに学力を向上させるような課題を課し、提出させることを検討している。

////////////////////////////////////
【根拠資料】

- 資料 5(2)-1 2020 年度国際観光学部設置計画利用状況報告書 (p.42)
 - 資料 5(2)-2 入試方式別 GPA データ
- ////////////////////////////////////

【基準6】教員・教員組織（その1）

【点検・評価項目】

- (1) 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。
- (2) 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

【評価の視点】

(大学として求める教員像の設定：各学位課程における専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等)

(各学部等の教員組織の編制に関する方針：各教員の役割、連携のあり方、教育研究に係る責任所在の明確化等の適切な明示)

(大学全体及び学部等ごとの専任教員数、適切な教員組織編制のための措置)

- ① 学科の目的を実現するために、教員組織の編制方針を明確にしているか。
- ② 学部、各学科の個性、特色を発揮するために、契約制外国人教員、任期制教員、非常勤講師などに関する方針を明確にしているか。
- ③ 各教員の役割、教員間の連携のあり方、教育研究に係る責任所在について、規程や方針等で明確にされているか。
- ④ 学部、各学科において、専任教員数の半数は教授となっているか。
- ⑤ 学部として、～29、30～39、40～49、50～59、60歳以上の各年代の比率が、著しく偏っていないか。
- ⑥ 教員組織の編制方針に則って教員組織が編制されているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評定： **B：目標の達成が不十分** >

従前の当学部は、教員組織の編制方針や契約制講師、非常勤講師の採用に関する方針を有していなかったが、本年度この方針を作成し、これに則った教員採用などを行う。(資料6(1)-1) 現状の教員組織は、年齢と職位に偏りがある。国際観光学部は助教および契約講師を除く専任教員29名中17名が教授であり、半数以上に達している(資料6(1)-2)。他方、年齢構成については、30～39歳が0名と比率が偏っていたが、2019年度は60歳以上の教員が2名退職し、30～39歳の教員が採用されたため、その比率はやや改善された。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

教育歴や研究業績だけでなく年齢構成に配慮した採用が行われている。

【問題点・課題】

学部化に伴って生じたさまざまな問題点などの検証を実施してから、教員組織を明確にして編制方針を整えていく。なお、規程や方針などについては、今後1年間程度の時間をかけて検討し、完成年度までには用意したい。

【将来に向けた発展方策】

今後5年以内に退職する教員がいるため、さらに教育歴や研究業績だけでなく年齢構成に配慮した採用を行う予定である。

//////
// 【根拠資料】

- 資料 6(1)-1 国際観光学部教員組織編成方針
 - 資料 6(1)-2 教員年齢表
- //////

【基準6】 教員・教員組織（その2）

【点検・評価項目】

- (1) ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上に繋げているか。
- (2) 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【評価の視点】

（ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動の組織的な実施、教員の教育活動、研究活動、社会活動等の評価とその結果の活用）

（適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価、点検・評価結果に基づく改善・向上）

- ① 教員活動評価等、教員の教育・研究・社会貢献活動の検証結果を有効に活用し、教員組織の活性化に繋げているか。
- ② 教員組織の適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善に繋げているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価： **A：目標が達成されている** >

各教員の教員活動は、国際学会発表、海外研修先の開拓にともなう事前視察、ホテルや美術館に学生を引率する課外活動などを毎月教授会で報告が行われているが、教員組織の活性化に結び付けられているとは言い難い状況である。

現状では、教員組織の適切性を検証する仕組みなどは特にないが、本学部においては文部科学省への設置計画に基づき教員の編成また新規教員の採用等を厳格に計画的・段階的に行い、教授会で検証している。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

教員活動による海外インターンシップの派遣先の調査や研究調査については内容を厳正し、インターンシップや研究に関連性のない内容であれば教授会で承認しないことを徹底している。

【問題点・課題】

教員活動評価を含む、多面的な活性化手法を検討し、教員組織の活性化を図っていく。2019年度以降、本件に関する委員会の設置を検討していく。

【将来に向けた発展方策】

今後は完成年度以降に向けて教員組織の適切性の検証につながる編制方針を策定し学部内で共有・明示する。

【根拠資料】

・なし

その他

【点検・評価項目】

(1) 大学が推進している3つの柱を基盤とした教育・研究活動を行っているか。

【評価の視点】

(「哲学教育」「国際化」「キャリア教育」に基づく、学部・学科独自の取り組みを行っているか)

① 哲学教育・国際教育・キャリア教育について、学科の教育内容に合わせた取り組みを行っているか。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を踏まえ、現状説明を具体的に記載してください。

【現状説明】

< 評価: **A: 目標が達成されている** >

基盤教育科目群において哲学・思想を2単位以上とる必要があるが、それ以上の哲学教育については、特に意識できていない。新一年生に向けてツーリズム・コースの課題として哲学教育を推進した井上円了先生を知るツアーを企画させ、課題発表会を行っている。

海外留学の他にも海外語学研修や海外インターンシップと海外フィールドワークといった実習も多く用意しており、2019年度は、ハワイ大学マノア校にて実施された夏季海外研修に12名が参加した。また、春季海外研修として、ドイツのミュンヘンへ7名、台湾の義守大学へ6名が参加する予定である。フィールドワークでは、フランスの地方都市のDMOにおいて日本人観光客誘客のプランづくりのフィールドワークに携わりながら、海外での業務のトレーニングを実施している(資料その他-1)。ただし、上記研修については、新型コロナウイルスの流行に伴い、ミュンヘンへの研修は期間を短縮して実施、台湾の義守大学への研修については中止した。

【点検・評価項目】および【評価の視点】を通して、長所、問題点、将来に向けた発展方策を記載してください。

【取り組みの特長・長所】

以下の5つの点に特長を有する。

- A. 国際観光学科では1、2、3年生を対象に「キャリアデザイン」の科目を設定し、早期から学生にキャリアについて考えることを促している。
- B. 「インターンシップ」や「フィールドワーク」の科目を設定し、多くの学生が実習を通じて企業との交流を経験できるようにしている。また、成果については、実習報告書を作成している。観光プロフェッショナルコースではインターンシップ先の企業を招いての報告会を行っている。(資料その他-2)
- C. 学生からの希望者が多い観光業界を中心に企業から人を招き、観光業界に合ったキャリア形成、就職活動について講演会や懇談会を行っている。
- D. 新型コロナウイルス問題が終息したのち速やかに海外でのインターンシップやフィールドワーク、または海外のホテルや地域観光振興組織などでの研修を開始できるように候補先の選定などを行っている。また、インターンシップやフィールドワークをオンラインで実施するなど、現況を踏まえた新しい取り組み方を検討している。
- E. キャリア形成支援委員会と国際観光学部教務課キャリア担当者等とが定期的に情報・意見交換を行い、学生の進路状況、支援方法、キャリア教育の課題に関して情報共有と検討を行っている。

【問題点・課題】

インターンシップやフィールドワーク等の演習科目数が増加し、担当する教員が一部の教員に集中し負担が増している。

【将来に向けた発展方策】

教務委員会においてインターンシップやフィールドワークの内容を今一度精査し重複している場合には、一部の演習科目を開講しないことを検討中である。

【根拠資料】

- 資料その他-1 グローバル化への対応 <http://www.toyo.ac.jp/nyushi/undergraduate/itm/ditm/>
- 資料その他-2 第3回東洋大学観光教育研究大会実施要領・参加者リスト